

BOTAN
ポータン

タイからの手紙(上)

富田竹二郎訳

タイ叢書 文学編 3



井村文化事業社 発行
勁草書房 発売

訳者紹介

富田竹二郎（とみた・たけじろう）

- 1939 大阪外国語学校英語部卒業
1941 同中国語部修了，同校大陸語学研究所所員
1942—1946 中泰比較言語学研究のためタイ国チュラーロンコーン大学に
留学
1946 大阪外事専門学校講師〔中国語〕
1949 大阪外国語大学助教授，タイ語学科主任となり現在に至る
1962 大阪外国語大学教授〔タイ語学・文学専攻〕
(1966—1968, 1972—1974 タムマサート大学教養学部，チュラーロンコー
ン大学文学部の「日本研究講座」主任教授として派遣さる)

日本音声学会，日本語学会，日本語教育学会，東南アジア史学会，
Siam Society 会員

著書：「タイ語基礎」，「日タイ会話辞典」，「タイ語の話し方」，「タ
イ日・日タイ小辞典」，「タイ語標準教本」Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ等

タイからの手紙(上)

＜タイ叢書文学編3＞

1979年9月20日 第1刷発行

著 者 ボ ー タ ン

訳 者 富 田 竹 二 郎 ©

発行所 株式会社 井村文化事業社

東京都渋谷区道玄坂 2-16-3

発売所 株式会社 勁 草 書 房

東京都文京区後楽 2-23-15

振替 東京 5-175253

落丁・乱丁本はおとりかえします

製版 清水印刷
印刷 港北出版印刷
製本 谷島製本

“¹ボータン
牡丹” 作

富田竹二郎 訳

チヨットマリー・チャーク・ムアンタイ

タイからの手紙（上）

プロローグ

第一信〜第五十信

※註

解説

※ 註には通し番号を用いたが、その中で（ ）をつけた番号は原著者の註、そうでないものは訳者の註である。

プロローグ：

ここに印刷して公開した全百通の手紙は、もともとタイ語で書かれたものではなくて、中国語に精通した人が、私の命令によって、その全内容をタイ語に置きかえ、然る後私がもう一度、耳ざわり目ざわりでない、タイ語らしい言葉づかいに書き直して、この中には皆さんの関心をひく話も有ろうかと思つて、読者諸子に提供する次第である。

これらの手紙は去る一九六七年、中国大陆からタイ国に、密入国しようとした中国人李万順より、没収したものである。

警察係官の尋問の結果、李万順なる人物は、大陸中国の対外接触都市である汕頭で、かなりの役職についていた、公務員でありインテリである、ということが分つた。彼は外国からの来信を全部調べ、いわゆる検閲官であつたが、手紙の検閲という仕事は、非常に骨の折れる仕事であつた。しかし当局は自国の人民が、外国に逃避した親戚友人から、幸福で楽しいというニュースを知つて、自由世界へ行くために、人民公社から逃げ出そう、などという気を起こさせないために、検閲させる必要があつた。しかしこの方

法も、所詮もろはの刃のようなものであつた。この方面の実権を握つていた、李万順自身が脱出したからである。

これらの手紙の本当の発信人は陳璇有氏、受信人は林玉環夫人である。これらの手紙の内容には、あまりタイ人のお気に召さぬものも、あるかも知れない。しかし愛する読者諸賢よ、鏡を見て、それが余りにも自分の真姿を、はっきりと映し出していると、癪にさわつて、その鏡を投げつけてしまふことだつて、あるではないか！

李万順は最初は郵便配達人だつた。彼はこれらの手紙の、受取人を探し得なかつた。そして彼は説明し得ない、何かの理由によつて、陳璇有の書いた手紙を、集めてしまつておいた。彼は新しい体制に、順応するすべを心得ていたので出世した。しかし彼は書信を取り上げたり、発送したり、読んだりするのが好きだつたので、検閲官となり、ついで汕頭での、この方面の実権を、掌握するに至つたのである。

これらの手紙を入手してから、相当時間が経つたが、私はこれを公開すべきか否かについて、何ヶ月も決心しかねていたのである。なぜなら、この中の何通かには、タイ人を侮辱する内容を、含んでいるからである。しかし何度も何度も、読み返しているうちに、やはり読んでいただく価値があると考へて、皆さんに提供することにしたのである。私が陳璇有の考へ方に、すべて賛成している、などと

考えないでいただきたい。なぜなら、人間の考えは各人各様であり、すべてが同じである、というようなことは、あり得ない。また私はタイ人であり、読者諸賢と同様に、当然国家民族を愛し、すべてのタイ人の、名誉を愛するからである。

陳璇有が私信の中で、彼の母親に語ったすべての事物と意見は、当然、みなさんがタイ国内の如何なる中国人にインタービューして得られる意見よりも、真実を吐露している。それではつぎにこの全百通の手紙を、皆さんのお目にかけるとしよう。

警察大佐

サラ・シントウータワット

第一信

「海皇号」^{ハイホワン} 船上にて

乙 西七月六日（1945・8・13）
5きのと・とり

私の非常に尊敬する母上のおみ足に、跪拝致します。

お母さんがこの手紙を、お受取りになるまでに、わたしはもうちゃんと、タイ国に到着していることでしょう。でもこの手紙は、何日の何時に出せるか、まだ分かりません。タイ国から出さねばならないかも知れません。そうなればタイ国のことや、会った人々の話を書いて、もう一通便りをします。

今日になって、やっと枕から頭が上げられるようになりました。船酔いというものは、とてもひどいものですね。わたしは、腹わたも何もかも無くなったみたいに、お腹がべこんとへっこんでしまふまで吐きました。ときには余り吐き方がひどいので、喉をまさぐって内臓でもはずれて出て来たのではないかと、見てみなければならぬほどでした。わたしがうっかりそんなことを何度もしたので、友だちが疑問に思い、鄭盛^{チョン・ヘン}が声をかけました。わたしは本当に思った通り答えたのですが、あいつは嘲笑し、他の友だち

も、それにつられて、みな大笑いしました。

「今のわしらは女のつわりとおんなじだ。ほんとに同じだ。」黄金が気づいたことを、述べましたが、わたしも全く同意見でした。つわりはひどい人も大したことのない人もあります。わたしはまだ馬麗婉のことを覚えていますが、お母さんは覚えてますか？ ほら、うちの隣りに住んでいた、麗婉ですよ。麗婉のつわりは村中の誰にも似ず、二ヶ月目からつわりが出て、臨月になっても、ゲーゲーと吐いていて、仕事なんかなにもできず、食事はお腹まで落ちたことがなく、口に入って喉を通ったかと思うと、暫くしてみな吐き出してしまい、ベッドに寝たきりで、姑さんが、もしも女の子だったら、小便担桶に棄てて死なせてしまえと、うちの家にまで聞こえるほど大きな声でぼやくと、息子は反対して、そんなひどいことができるか、誰かにくれてやればいいじゃないか、と言ってましたが、幸いなことに、生れてきたのは男の子で、父親も祖母も、とても可愛がってましたが、母親の方はどちらかと言うと嫌ってましたね。麗婉が寝る前になると、妊娠するんじゃないかって、毎晩夫とけんかしてたのを覚えてますよ。結局は夫婦別れをして、麗婉は寺へ行って、尼さんになりましたね。むこさんの方は新しい女房を豫備に用意してたんで、別に痛くもかゆくもない、ということでしたね。

話がえらく脱線してしまいましたね。旅の話をするつも

りだったんですがね、それがですよ、船酔いで吐き、ふらふら目まいがすることを知って、わたしは今までも、うんとお母さんが好きになりましたよ。わたしのために、お母さんがどれほど苦勞をなさったか、ということが分かりましたよ。そしてわたしが、お母さんを離れて、わたしらのものでない、他国へ行くということは、正しかったか、間違ったことをしでかしたのか、わたしにはまだ、定かではありません。

海は平らで、あらしも無いのに、わたしは船酔いをしてるんです。外洋を航海する船というのは普寧県全部みないに、ものすごくかくて、人が何千人も乗れ、傾きもしないし、全然ぐらぐらしないんです。船酔いそうな筈はないんですが、わたしはみんな酔ってしまいました。一歩らくだったのは鄭盛で、彼は最初の日に、少し吐いただけなんです。それで彼はわたしを嘲笑する機会があったんです。われわれ人間というものは、妙なもんですね、他人の苦痛を笑うのが好きなんです。黄金は一番ひどい目にあって、今日でもう十日以上になるんですが、まだ海に慣れた気配もありません。わたしはまあ鄭盛と黄金の間ぐらいです。

わたしは友人たちと一緒に、船腹の下の方で、まるで豚みたいな、ぎゅうぎゅう詰めで寝てるんです。タイへ行くのが二度目、三度目という人々は、金を持っているので、

わたしらとは異なり、それぞれ個室にいて、上等の食事をしています。しかしわたしらのような新顔は、タイ入国税をたくさん払わないと、いけないんです。だから儉約しなくてはなりません。この次ぎ来るときには、お母さんと個室に入れるでしょう。そしてらお母さんには、今そちらで毎日坐つて菜^{チヤイ}脯^ポとか、鹹^{ソルト}菜^{チヤイ}を噛んでおられるでしょうが、船では毎食のように、お粥と豚肉を、食べさせてあげますよ。

わたしは山、森、田んぼしか知らなかったの、海を見たときには、興奮しました。毎日毎日見慣れた長い山脈は、わたしら潮州語では、「長山^{シヤン}」と言えば、われわれの国の象徴であり、名前となっているほどです。海の風は山の風とはとても違っていて、ときには塩からい匂いに、耐えられないこともあります。海の水をなめて見ますと、塩からくて苦いほどですが、海水のこの苦さが、傷を治すには良い薬になります。船員の一人が言ってくれましたが、この塩からさが、皮膚病の治療には、最高に効くそうです。ところが甘い物は何によらず、ある種の病気の因になるとか、その人が甘さの害を説明するのを、坐つて目をばちくりさせて、聞いていました。

「本当だぜ、坊や。甘いものは良かあねえ。タイの諺でも『甘きは病い、苦きは薬』って言つたらあね。」

「ばくを坊やって呼ばないでよ。ばくは瓊有^{マツナリ}って名前な

んです。」とわたしは丁寧に言いました。わたしは誰かれなしに、坊やと呼ばれることは嫌いです。お母さんが余計に恋しくなるからです。わたしはこの語を、目上の親族のためだけに、大切に取っておきたいのです。

「お前の名前は意味が良い。お前はタイへ行ったら、名前どおりダイヤモンドが持てるようになるぜ。」

「ばくもそう思ってます。」わたしは感謝の気持ちで、彼に微笑しました。

「お前、タイへ行って何をするんだい？ え、ちびちゃん。」その人はある日わたしに、こう尋ねました。この父つつあんは、わたしと話をするのが本当に好きで、わたしが男前で、生まれてから今まで、働いたこともないみたい皮膚が白いと、賞めたことがあります。でもわたしの掌は、きつい仕事をしていたから、がっしりしています。田んぼを耕すには、日がな一日陽にさらされねばなりません。わたしはいつも長袖の上衣を着ていましたから、陽焼けていないんです。

「さあ何をするか、まだ全然分らないんです。」わたしは真正直に答えました。わたしの頭の中では、まだあれこれと、考えをまとめることができなかったのです。わたしがこの大船に盛^ミと一緒に乗り込んだのは、タイにいる盛の伯父さんからの手紙に、タイという所は暮しよい所で、大でさえ飢え死にすることはない。自分の得手^{キョウ}しだいで、

果樹園をやっても商売をやってもよく、何でもやれる。金を蓄えるということを知っておれば、中国の親族に送金しても、まだ残りを元手もとに積んでおくことができる、と書いて来た、その影響なんです。それでわたしはお母さんと弟から逃げて、家を出て来たんです。わたしの暇乞いの手紙を読んで、わたしの意図を理解して下さったのなら、お母さんはこの息子をきつと、許して下さいるものと思っていいます。わたしは、勤勉にせつせと働き、儉約に心がけるよう頑張ります。わたしは新生活を始める吉祥とするために、稼ぐことができた最初のドルを、お母さんのもとに送金するつもりです。

「お前は何年学校へ行ったんだい？」その気前のよい船員さんは、わたしに尋ねましたが、わたしは正直に、学校で勉強するどころか、学校なんてどんな恰好をしているのか、見たこともないと答えました。

「そいつは惜しいな。読み書きができりゃ、お前の力になってやれるんだがな。タイ国には心安い親戚(12)が一人あって、乾物屋をやっているが、わしと手を組んで、干し柿のような、中国の乾燥食品を売る、エージェントもやってるんだよ。お前はそこへ行って、彼の手伝いをして、物を売ったり、簡単な帳面つけができるところだったんだがな、そうか、学校へ行ったこともないとすりゃ、苦力カワリの仕事しかないな。」

「でも学校へ行ってなくても、読み書きができる、というところあるんですよ。」わたしは微笑しながら答えると、彼はふしぎそうに目を円くしました。

「という所を見ると、お前は読み書きができるんだな、そうだろう？」わたしは肯定しました。

「どういうやり方で、勉強したんだい？」

「お母さんが教えてくれたんです。」

「何じゃって？ お前のお母さんみたいに、百姓の女子に、読み書きができるって！」彼はますますふしぎそうな態度をし、それどころか、わたしの言うことを、大分信じないようでした。

「実を言いますと、わたしの母は、以前官員様のお邸づとめをしていたことがあります、そこのお嬢様がたに、非常に可愛がられ、書斎で勉強なさるときに、しょっちゅう母を呼んで、用を言いつけられたんです。そういうわけで、母もついお相伴しうはんで、勉強ができたんです。お嬢様がたがみな、結婚してしまわれると、母は父の所へ嫁入って来んです。母はわたしが小さいときから、さあ五つぐらいでしたかな、その頃から読み書きを教えてくれました。もう母から習うことがなくなると、わたしは町へ行って、本を買って来て、独学で読み書きを始め、それは今まで欠かしたことはありません。わたしの職業は百姓でしたから、今丁度二十歳ですが、習い憶えた知識は、まだ役立てたこ

とがないんです。」

ここまで語ったとき、わたしは今の時世に科挙¹³の制度があったらなあ、というお母さんの言葉を思い出しました。わたしには、¹³科挙¹³の地位につける機会などありません。状元や探花はとても無理としても、秀才ぐらいにはきつとなれて、官吏に登用される機会があったでしょう。そしてひょっとしたら、良家のお嬢さんを妻に迎え、それから出世したかも知れません。しかしわたしには、こういう機会はもうありません。

「一べんわしの言う通り、ちょっと書いてみなさい。ちびちゃん。わしの知識もそう捨てたもんじゃないう。が、こうやって船で働いているのはな、パンコクの親戚に品物を送って、何とか共同で儲けがあるし、それに旅が好きで女房や子供もないしな。」彼の顔はそのとき、わたしが気がつくほど曇りましたが、こうして知り合ったばかりの人に、私的なことを聞くのは気がひけて、よう質問しませんでした。そうそう、この人の名前を言うのを、忘れていましたが、羅永泉¹⁴というんです。四十すぎの、まだ非常に丈夫そうで、大きな四角い顔をした人です。いつも慈悲深い輝きを持った目をしていて、わたしたちのことに気を配ってくれ、薬を持って来て飲ませてくれたり、一人々々に船に酔いすぎないようにする方法を教えてやるように心がけていました。わたしたち船腹の下にいる連中は、みなこ

の人がとても好きなんです。

わたしは彼の言う通り、今までに使ったことのない、新型の自來水筆¹⁵で字を書きました。わたしは墨をつけて書く毛筆の方に慣れていたんですが、今お母さんにそのペンで便りを書いていきます。この種のペンは、何度も墨をつける必要がなく、胴体に墨を貯めるチューブが入っていて、ひとりでに少しづつ、しみ出てくるんですが、字の線は非常に細いです。このペンは羅永泉がくれたんです。彼が書かせた言葉は、まあ難しい方で、彼は覚えていた『三國志』演義の内容を話して、わたしに書かせました。それから話を商売のことに変えて、いろんな商品名を書かせました。干し柿、什錦糖¹⁶、干し荔枝、絹布、針菜などの他に、いろんな食べ物がありました。それがすむと、わたしに勘定をやらせてみました。難しかったけれども、お母さんがいつもわたしにやらせて下さっていたので、すばやくやれました。何とか自活できるように、わたしに知識を授けて下さったお母さんの御恩は、とくと記憶しておき忘れません。羅永泉はわたしの筆跡を見て、言いました。「相当な腕前だな。ちびちゃん、もっと稽古できたら、潮州府の高級学校を卒業したと、誰に言いふらしても構わんぞ。」その賞め言葉はわたしに、誇りを持たせましたが、この誇りは最初の先生である、お母さんに差し上げたいと思います。お父さんが亡くなってから、わたしたち兄弟にとつ

て、お母さんは父であり、母であり、また先生でもありました。わたしの持っているただ一人の仏様は、お母さんです。わたしはお母さんを、非常に誇りに思っています。今度一緒に出て来た友人たちは、字を識らない連中ばかりです。鄭盛はほんの少し識っていますが、てんで見られた字ではなく、線をまっすぐ書けないので、物の役に立ちそうもありません。

「お前はわしの親戚の羅源通の所へ住み込まんかね？ お前が喜んで行くようなら、あそこで預って、働かせてもらえるように、一筆書いて、お前に持たせてやるがわ。それとも何とか助けてもらえそうな親戚でも、タイにあるのか？」

「わたしには親戚は全然ありません。一緒に来た友だちの、親戚があるだけなんです。」わたしは鄭盛の方を、横目でちらっと見ながら言いました。「もしそうお願いできましたら……」。

「そんな言い方はよせよ。瓊有、四年前のタイの大洪水のときに、母親と一緒に死なせてしまった、一人の息子と同じ程度に、わたしはお前が可愛いんだ。二人は下痢で死んだよ。あの年の洪水は、水かさが高くて、喉まで水につかって、道を涉ったもんだよ、ほんとに。土地の低い所は、舟を漕いで行かねばならんほどだった。水がすっかり退いてしまいうまでに、一ヶ月近くもかかった。水が退いてから

みんな困った。食料不足で食べ物が手に入らん。その上、地区によっては疫病が発生したんだよ。」

わたしはできるだけ悲しそうな顔をして、お気の毒にと言ってあげました。

「でも今では少し幸福になり始めたよ。」

「どうしてですか？」

「お前に会えたからだよ。父さんの養子になりなよ。」

あの人余りてきばきと、話をしめくくってしまったので、わたしはびっくりしました。そればかりではなく、あの人はわたしを引寄せて抱きしめ、わたしの肩に顔を埋めました。わたしは胸がつかえ、断ることもできず、あの人をお養父さんと呼びました。わたしが他人を父として敬うことを承知したことについて、お母さんは非難なさるまいと思います。しかしわたしは羅永泉さんに、一つだけ註文をつけました。それはまだ旧姓の陳姓を、名乗らせてもらうということです。わたしは慣習に従って新しい父を拝礼しました。そしてその夜から、わたしは寝所を移し、父の部屋に入って寝ました。父は新しい生活について、親切にいろんなことを、数えてくれました。

「学校など行ったことがないなどと誰にも言うてはいかん。何もうそを言う必要はないが、誰にきかれても、まあ読み書きができ、計算ができるくらいの知識は持っていますと、言うておけばよい。計算をし、帳簿をつけるのに役

立つように、父さんが算盤の使い方を教えてあげるよ。」

「どうしてそうなんですか？ お母さんという先生がいて、独学で勉強したということを、誇りに思っているんです。」

新しい父は軽く笑いましたが、一風変わった独特の笑い方で、中国人離れのした笑い方でした。

「お前はまだ知らんがね、タイという国では、本当の知識よりも、紙ぎれの方が尊敬されるんだよ。」

わたしは全くわけが分かりませんでした。

「父さんの言う紙ぎれというのは、どここの学校を卒業した、という証書なんだ。有名校の卒業証書があれば就職し易い。年輩の人の場合は、まだ大したことはないが、タイ生れの若い華僑の場合は特に気をつけないといかん。あの連中の中にはタイ語を勉強し、タイ式の考え方が、頭の中でチャンボンになり始めたのがある。タイ語を勉強するということは良いことだよ。しかしな、自分で勤勉にせっせと働く者を、軽べつするという考え方に、心をとられてしまふなよ。連中はとかく知識よりも、卒業証書の方が重要だ、と誤解するんだ。お前は連中に適応するように、自分を変えて行かにならん。連中に本当のことを言うなよ。口がないみたいに、自分の能力を見せてやれ。一杯詰まっている石油かんよりも、空の石油かんの方がよく鳴る。よく覚えておくんだよ、璇有、ちびちゃん。」

ん。」後で分ったことなんですが、この「ちびちゃん」というのはあの人が死なせた男の子のあだ名¹⁹だったんです。あの人が始めてわたしの顔を見たときから、わたしを「ちびちゃん」と呼んだのは、わたしの顔が多分その人に、非常に似ているからなんでしょう。

次の日から父はわたしに、算盤のはじき方を、暇を見つけては教えてくれました。そういうわけで、わたしはあの人を「父うさん」と呼ぶことに口が慣れてきました。しかし、鄭盛は、非常に腹の立つことをしました。

「璇有！ 船乗りの連中は、海の中で何ヶ月も一年も、自分らだけで暮らして、女に会わぬ。お前の顔は女みただから、恐らく代用品になるんだろうさ。」と言って笑って、わたしを嘲りました。彼はわたしが義父と一緒に暮していることを、下品なことばで話しました。

「わしらはこれからあいつのことを、小娘さんと呼んでやれよ。」

「そうだ、そうだ。お色気たっぶりの小娘さん。青提灯の娘さん！」²⁰

わたしは彼らに分からせようと、説明につとめました。が、盛は信じようとしません。それで彼がああ言葉²¹を三度目に使ったとき、わたしはもう感情を抑えることができませんでした。

「下品な人間め！」わたしは拳をふりあげて、彼を非難

しました。友人たちは止めるどころか「やれ！ やれ！」とけしかけ、黄金は「璇有！ お前、男であることを証明してやれ！」と叫びました。

わたしは小さいときから知り合ってきた友だちと、事を起こすことは残念でしたが、彼に義父とわたし自身のことを、下品な言葉で言われたことが不満でした。わたしは間違いでもなし、義父もそんな態度をしたことはありません。鄭盛は恩知らずです。義父はいつも、わたしらを助けてくれていました。彼自身も義父から、船酔いの吐き気を止める薬を、もらったことがあるんです。

わたしは戦いには勝ちました。しかしそのことは、全然誇りに思っていません。友人を敵にしまったことが、残念なんです。誇りというものは、むしろ敵を友人に変える能力から生まれるべきです。

「お前なんかタイへ行つて、飢え死にしがれ！ もうお前とは交際合わんぞ。おれの伯父さんはな、自分の甥に危害を加えるような奴は、絶対に歓迎してくれんぞ！」

「勝手にせい。わたしはお前なんか、そう頼りにせんでもええのじゃ。盛！ だがな、一つだけ覚えといてくれ。わたしはまだいつでも、お前を友だちじゃと思うとる。今日のことは海の風と一緒に吹き流してくれやい。」

「何を抜かすか、男淫売！ 今日のこと死ぬまで覚えておいてやるわい。」

鄭盛はわたしの最初の敵となり、わたしは残念でした。しかしどうしようもなく、仕方のないことだったんです。しかしわたしのことは、心配ご無用です。義父はわたしを親戚に託す手紙を、書いてくれました。わたしはタイへ行っても盛が侮辱したようには、飢え死にしないでしょ。盛の方は伯父の所へ行つて、肉体労働をしなきゃなりません。しかしわたしにはまだ、幼いときからお母さんが仕込んで下さった、智慧の力があります。

算盤の使い方を勉強する時間になりましたので、この手紙はこれで終らせていただきます。父が何をしてたんだときましたので、わたしは正直に、母に手紙を書いていんだと、と答えますと、父はよかった、それは正しいことだと言いました。

この手紙を以て、愛する母上のおみ足に、跪拝致します。

孩児

陳璇有より

第二 信

外航船上にて

乙酉七月十五日 (1945・8・22)

非常に尊敬する、母上のおみ足に、跪拝致します。

今だにまだ、タイ国には到着しません。この船はすごくしげしげと寄港して、品物を受渡ししたり、休んだりするんです。けれどもそれだけ、勉強したり稽古する時間が、増えてよろしいです。わたしが頭のめぐりが速いと、父さんがほめてくれましたが、わたしのこの点の良さは、お母さんがたゆまず教えてくれた、おかげですと答えました。

わたしは部屋から出て、甲板でこの手紙を書いていきます。今日は中元節^{ミナモト}で船中のすべての人に、特別の食事が出ましたが、祖先を拝む儀式はなく、船の守護女神、海神およびすべての無縁仏に、お供えをしました。父に馬鹿な質問をしましたが、船には生きた雞をたくさん飼っているのに、どうしてお供えには、アヒルばかりで雞は使わないんですかと言うと、父は笑って、雞は泳げんじやないか、ちびちゃん、と答えました。それでやっと、船を海中で泳ぐアヒルに、たとえているんだということに、思いつきまし

た。それで泳げないものは、海神や船の守護女神へのお供えには用いない、という主義を採っているんです。料理はうちで神様を拝むときと同様に三種類で、魚とアヒルにガチョウで、いろんな炒め野菜がありました。わたしの食べたことのない、変った調理法の、アヒルの玉子がありました。うちでは塩漬けにせねばならぬほど、玉子が余ったなんてことはありませんでした。

わたしは六ヶ月前に過ぎ去った、旧正月のことを、つい三日ばかり前に過ぎ去ったように覚えていきます。わたしは朝早く起きて、お茶をいれ、前の日にしめておいた、アヒルや雞と一緒にお供えして、神様を拝みました。またお正月に町へ遊びに行つて、面白かったことをまだ覚えてますよ。あのときお母さんが、祝いに下さったお金は、財布の底に入れて、財を呼ぶ幸運のお金として、今だに全部持っていますし、今後もし使わない積りで。今わたしが使っているのは、去年田植えの賃仕事に行つて、もらつて来たお金です。

このような節句の機会に出会うと、ますます家が恋しくなります。一方の心では来るべきではなかった、家にいても結構安楽だったのと思いますが、また一方の心では、お前のやり方は正しかった、家に居れば百姓をせねばならぬ、タイへ行つて知識を役立てて金をかせぎ、お母さんに

送金して使ってもらった方がいいんだとも思います。わたしは中国がきらいだというんではありません。でも中国は人が多すぎます。海外に発展して生計を立てるというのもよろしいでしょう。そうすれば他民族も、もっと中国人を知るようになるでしょうし、われわれが如何に能力があり、古代より榮えて来た民族と言われるわけを知ってしょう。わたしにはわたしがその出生においても、その精神においても、中国人であるということを忘れる日はないでしょう。世界中のどこにしよう、タイ国にしよう、紅毛の連中の国にしよう。

船中の燈光が海面に反射して、金魚の鱗のように、ぴかぴかと輝いています。海風と水面に、わたしの思いを託して、愛するお母さんに送ります。わたしは暗やみをすかし、遙か故郷の方を、眺めております。あの空につきさすように、高く長い山脈が見えるかと思つて。でもわたしの目に見えるのは、広漠たる大海原ばかりです。今日は一寸した暴風雨があつて船が揺れ、船中の人はほとんどが船酔いをしました。わたしは海に慣れ始めたのか、大して難儀しませんでした。それで昔のことなど思い起して、感慨にふけていゝことができるのです。盛と友達だったときのことを思い出しました。しかし今ではかたきどうしのうちに、物も言い合いません。わたしと盛とは小さいときから、一緒にままごと遊びをし、田を耕しに行き、水牛を飼

つたものでした。大きくなってからは、盛は久しく町へ行っていましたが、それでもわたしは仲が良かったのです。ところが今ではわたしと顔を合わすと、彼は鬼のような顔をするんです。金が二人の間を調停しよう、と努力してくれているんですが、彼は子供だったときと、一向に変わっていません。みんなが考えているよりも、彼はずっと長く、友人であるわたしに恨みを抱き、腹を立てているんです。彼は自分の誤ちを認めたことがありません。いつでも悪いのは他人なんです。一人の友人を失つたことは、わたしを非常に悲しくさせました。

見渡す限り目に入るのは、青藍色の海水ばかりで、岸はありません。大洋の広さは、尽きるところがないみたいです。わたしは心に、ある恐怖を抱いていましたが、友だちには知られないように、できるだけ抑えていました。友人たちの中には、ぼかんと、うつろな目をして、家が恋しいとぼやく者や、嫁を連れて来なかつた世帯持ちの者は、女房が恋しいとぼやく、女房連れの世帯持ちは、坐つてにやにやしていました。中には一体いつになったら、タイ国へ着くんだと、そればかり言っている者もありました。異常な興奮状態が見られました。

われわれはもう中国から、遠く離れて来ているんです。う。わたしは、お母さんに手紙を書いていて、うっかりして、ついしばらく、うとうととしていました。父さんが甲

板に上つて来て、部屋に入つて寝なさいと呼び、わたしにこう告げました。

「タイ国に着いたよ。だが運の悪いことに、船が浅瀬^バにつかえるので、メーナム河に入つて、首都に直行できないんだ。それで潮が満ちてくるまで、一晚中この河口²³に、じっとしていなきゃならないんだよ。船腹の下にいる連中は、ちょっと困るだろうな。物凄^バい蚊だよ、部屋に入つて寝なさい。蚊帳があるから、何とか蚊は防げるだろう。」

そこでわたしは腕にも脚にも、蚊がいっぱいたかっているのに気がつきました。甲板から下に降りると、このひどい蚊のことを、がやがやとほやいている、人々の声がきこえました。一寸気の利いた考えの持主が、紙切れやなんかを燃やして、煙を立てますと、蚊軍は撤退して、他の場所へ直行していきました。ここの蚊は本当に軍勢と呼ぶべきで、それほど大勢で押しかけてくるんです。この蚊たちが一致団結する心を持っていたら、まるまる一人の人間でも、担いで行けるでしょう。

父さんはわたしに不可解なことを、一つ助言してくれました。

「お前のお母さんが、町のお邸へ女中奉公に行つていたことがある、などとは決して誰にも、言うんじゃないよ。そんなことを言えば、考^カえのない人から、軽べつされる。ある種の人々は、召使いになるということは、不正なこと

をするよりも、もつと低級な仕事だ、と思つてゐるんだよ。そういう連中は、召使いになるぐらいなら、喜んで人の物を盗んで食うよ。お前は女中という仕事が、まっとうな仕事で、何らいみきらうべき仕事ではない、と思うだろうが、他人はお前とは、同じようには考えないのさ。心がすっかり新しい考^カえに、毒^{ドク}されているんでね。それから、お前は何という姓の中国人であるか、何という姓を受け継いだか、ということ²⁴を忘れるんじゃないよ。暮しが楽になつて、しあわせになったら、陳姓と羅姓の人々を、見すてはいけない。」

わたしは承知しましたが、心の中ではお母さんの姓である、林姓^{リン}を一つつけ加えました。わたしにはお母さんの姓も、やはり忘れることはできません。それを考^カえていると、おばあさんのおばあさんは、何という姓だったのか、ということまで考^カえてしまいました。そうやって考^カえて行くと、中国人というのは恐らく、みな親戚どうし、と考^カえるのが正しいでしょう。父方、母方の先祖をたどつて行けば、どこかで姓²⁴がつながっている筈で、中国人どうしは、みな親戚どうしでしょう。そして他の民族の人々も、同じ地球上の親戚どうし、と言えましょう。しかしながら遠い親戚よりは近い親戚が、目下の親族よりは目上の親族の方が重要なのは当然です。

明け方になると、わたしはタイ国の太陽を賞^{ホウ}でるために

とび起きました。気候の変化に対する、皮膚の敏感な反応から、わたしはこの国が郷里より暑い、そして太陽がじりじりと、肌を焼くだろうと思いました。「今タイの季節は何ですか」と父に尋ねますと、父は「雨季だ、ほとんど毎日雨が降る農耕の季節だ、タイの気候はわしらのくにの気候とは、えらく違っていて、冬なんてものはほとんどなく、一年中ほとんど、夏ばかりだよ。」と言いました。

朝おそくなって、潮が満ちてくると、船はまた出発しました。まだ全然タイ国を見たことのない連中は、みな景色を見るために甲板に上って、ずらっと並んでいました。わたしは歩く途中で鄭盛と行き違いましたが、彼はそっぽを向いていました。黄金はわたしの腕を引っぱって、歩いて行かせてこう言いました。

「お前どうするんじや？ あいつとそう腹を立てていたら、厚かましくあいつの伯父さんに、厄介になれんじやないか！ この国には全然親戚はないし、知らん人ばかりじやないか。」

「お前と同姓の人は、恐らくお前を捨ててはおかないさ。」わたしは彼の気持ちこそこなわないように、最も丁寧に答えてやりました。すでに友人であった鄭盛を失った以上、今またもう一人の友を、失いたくはなかったのです。「わしの方は心配ないんじや。やって行く道がついた。義父さんがわしのために、タイで仕事を見つけてくれるんじや。」

「そんなら、わしはどうなるんじや？ そりゃあタイにも、同姓の人はおるじやろうが、どこに居るか分からん。同姓の人に出くわすまでが、大変じやないか。わしが盛の味方をせんからというて、あいつはわしにも、腹を立ててるんじや。」

「そりゃいかん、何ちゅう奴じや。」わたしは辛抱しきれなくなつて、大声を出しました。

「あいつは、わしらの方から頭を下げるべきじや、と思ふとるんじや。そいで、今すぐわしらに、あいつの子分になれ、という恰好をしやがるんじや。あいつが何を言おうが、命令しようが、はいはいと言わにやならんとな。じやがわしらはみな、似たり寄つたりの人間じや。そうへいへいといつて行けるか！」

わたしはため息をついて、それ以上批判することはやめました。

わしはお前を見すてたりせんぞ、金よ。義父さんはわしを、ある店で働かせてくれるんじやが、とにかくわしと、一緒に行つてもよい。そうひどいことも言うまいて。本当の中国人どうしだもんな。仕事が見つかるまで、泊めてくれと頼むのさ、そこで働かせてくれるかもしれんしな。何とかやって行けるようになったら、別れて別に自分で、商売をやればよい。向うが引受けてくれるように、義父さんに口添えを頼んでやるよ。わしらはその店に、二人で一緒